

「赤い鳥」綴方の実践記録

——「綴方の書」(木村不二男著 昭13)を中心に——

北岡清道

は十二編である。

また、木村不二男はこの三重吉の「序(遺稿)」に触れつつ、その「自序」の中で次のように言う。

○この書こそ随分長い間の計画であつた。最初の意図は鈴木先生
の遺稿に語られてゐる如く、綴方作品集の刊行に在つた。それ
は既に昭和九年の秋である。種々の故障からして、実現が遅れ
漸くいまかゝる形で世に見えることとなつたのである。

私の感慨無量の中に最大の痛惜は、これを率⁴り、喜んでい
たゞくべき恩師三重吉先生のもはや存せられぬことである。

「この序文がいけなければ幾度でも書直して上げる」と余白に
小さく鉛筆で附されて送られたその遺稿を掲げて涙を新にする。
〔自序〕3ページ)

それぞれに師弟のこまやかな交情がしのばれる文章である。とく
に、あの、彼岸をもって知られる三重吉が、「この序文がいけなけ
れば幾度でも書直して上げる」とまでいうのは、木村不二男に対す
る三重吉の信頼や情愛がよほどのものであつたからこそであらう。

「綴方の書」は、三重吉を師と仰ぎ、多くの「赤い鳥」入選作を

「綴方の書」(昭和十三年四月二十一日 刀江書院 四六判四一
三ページ 定価巻田五十銭)の著者、木村不二男(明治三八—昭五
二年)は、鈴木三重吉の門弟として自他ともに認ずる「赤い鳥」綴
方教師であつた。巻頭に三重吉の「序(遺稿)」をおき、「綴方の書」
の本文の末尾を「鈴木三重吉氏研究」の章でしめくくるといふこの
書の構成の上に、そして、「この書を鈴木三重吉先生の靈に捧ぐ」
という献辞の上に、このことは明瞭に示されている。

三重吉は、その「序(遺稿)」の冒頭で次のように書き記している。

○こゝに纏められた綴方作品は、木村君が北海道石崎小学校で五
箇年、ついで東京市矢口東小学校で三箇年指導された間の収獲
の代表的なもので、そのうち三十篇は私が「赤い鳥」に選出し
たもの。中でも「お見舞」「奥多摩」「富岡」等の如きは「赤
い鳥」の最近の高潮した水準上で特選を誇り得た作品である。
木村君はとくから私の綴方教育の主張に共鳴されて、私と親
しく来往されて直接愚見をも聞いて下さつてゐる熱心な指導者
である。〔序(遺稿)1ページ〕

(注1) 実際には、「綴方の書」に掲載された「赤い鳥」入選作

出した木村不二男が、その作品を語り、そのこともたちを語り、教室を語り、また、子どもたちをとりまく社会の現実について語るといふ、「赤い鳥」綴方教師の実践の記録である。

二

「綴方の書」の刊行の目的について、木村不二男は、「自序」の中で次のように述べている。

○子供の実体が彼等がとほ／＼綴り上げた綴方に現れることは意外な程である。彼等の芽の性質、伸びゆく方向の暗示、子供の心理、伝統の消化程度、彼等なりの時代意識、それ等はまことに正直に、その儘の形で綴方作品の中に確かめられる。それは私の十幾年の体験に基づいていさ／＼かも誇張ではないと断言したい。私はその意味で、綴方こそ彼等の内部をうかがふ聴診器、教育の鍵であると思つてゐる。だが、この科は在来教育上の一教科として専門的に扱はれてきた為に、限られた人達以外には殆ど顧みられなかった。子供の正体は此処にあるものを、あつてもない、かうでもない、と駆け巡つてゐるかに見える世間、このことを一寸でも知らせてあげたいもどかしさを感じる。この書の意志は此処にある。世の子供の親がたにそれ／＼その後継者の明白な正体をお知らせするよすがにとも。「自序」2ページ)

十幾年の実践の体験から、子供の内部をうかがう聴診器であり教

育の鍵であると思つて綴方を通して、子供の明白な正体（実体）を、世間や世の親たちに知らせることが、この書の目的だといふのである。教師ではなく、世間一般や子供の親たちを説者として予想しているところが「綴方の書」の特色の一つである。したがって、これは、たとえば、「綴方教室」（大木頭一郎・清水幸治共著、昭12・9・3 中央公論社）などのように、いわゆる実践記録ふうではないが、しかし、全体を通して見れば、やはり、木村不二男による「赤い鳥」綴方実践の記録であることにちがいはない。

最初は「綴方作品集」として意図されていた本書が、「此処には北国の寒村からはじまって、現在に及ぶかなり長い間の私の教育生活と子供等がのぞかれる。」「自序」2ページ」というような教育実践の記録として刊行されることとなった経過については、十分な説明はおこなわれていないが、大木・清水両氏の「綴方教室」が一つの契機になつてゐるだろうことは想像にかたくない。^(注2)

(注2) 「綴方の書」の末尾の章「鈴木三重吉氏研究」の一節に、次の一文がある。

○「私は「赤い鳥」の伝統精神を時代に濾しながら何とかして新しい形式を産み出さうと努めてゐるものゝ一人である。私と同じ意図を有し且つ三重吉氏の指導精神を伝へてゐる人に先輩大木、清水両氏あり、氏等の合作になる名著「綴方教室」がある。「綴方の書」三三三ページ)

「綴方の書」は、次の九つの章と附録の佳作集によって構成されている。

序

尾高豊作^(注3)

序(遺稿)

鈴木三重吉

自序

ある少年記

今の子供

子供の現実

教室経営

文章論

人間性

都市の綴方

村の綴方

鈴木三重吉氏研究

附録 佳作集

(注3) 尾高豊作氏は、「綴方の書」の発行者。

「綴方の書」の中にとられている綴方作品は、本文中に三十一編、附録の「佳作集」に十二編、合計四十三編である。本文中の三十一編の中には、著者以外の人の指導作品六編が含まれている。

「綴方の書」は、これらの綴方作品を核にしなが、その作者やその他の子供たちについて語り、それらの作品を生んだ教室の状況を述べ、さらには、子供たちをとりまく「現実」を解剖し、それらを通して、著者の児童観・綴方観・教育観・社会観を披歴していくという手法がとられているのである。

以下、これらの章の中から、教室経営、綴方観、小林映子と爰川求女、の三点をおもな考察の観点として、「綴方の書」を見ていくこととしたい。

三

まず、木村不二男の教室経営の理念と方法を見てみよう。

「教室経営」の章は、1教室気風 2組織 3小景 4同級会 の四つの節から成るが、この中、2組織 で氏の経営組織について述べている。

静坐法 毎日朝の一時間目の一部を割き最も大切な根本的方面へ沈省せしめたい。その前に静坐法五分。(中略) 効果は相当あった。後、教育勸語拜誦。月、木の修身の時間には一節宛解義、時々教室、学校、時には社会時事等に基づく簡単な現実批判。四人一組分団 掃除配当、教室事務分担、教便物使用等の便宜の爲。組長を一人、これは適当な時期を見て交代、なるべく全児に及ぼす。綴方の鑑賞等は主に分団を一単位になされる。

学級新聞発行 各分団交代、材料は学級全部より提供、それを当番分団が組長支配の下に選択整理、教師の補導に依つて謄写にする。週一回発行。その週の鑑賞文はこの中に印刷される。

(後略)

雑誌回覧 一人が一日だけ使用。これは教師の寄附に依る「赤い鳥」その他の綴方雑誌である。

綴方副読本使用 これは郷土社発行故小砂丘忠義氏編輯「綴方読

本」を主として使用した。価格も五銭で全児購入し得るのと、内容も頗る良心的、且つ子供等の作品も殆ど毎月掲載されてゐたからである。(附記しておきたいことは小砂丘氏は隠れた偉大な綴方界の権威であり恩人であつた。綴方を現在の水準にまで押出した貢献者の中に当然入るべき人である。その為、病を得て昭和十二年秋他界されたことは惜しんでも余りある。)

自治会 級長が会長副級長が副会長。前者は男児、後者は女児であつた。その際教師は参考的な指導位置にあるのみ。この決議は重要視した。月一回、放課後一時間位を当てた。

小遠足 これは月一回の学校行事である。

クラス会 学期末にさゝやかな茶菓に依つて一回開催。隠し芸百出、まことに面白いものがあつた。この際、分団単位で、彼等が余暇を偷んで練習した児童劇が上演されるのである。

唱歌会 唱歌の時間を利用して月一回、全児が必ず何かに出ることが約束されてゐた。

児童劇の会 クラス会と前後して学期末一回。多くは児童の持ち寄り創作である。(中略)特別な指導をした訳でもないが、日頃の遊戯半分の彼等のたしなみの故か、子等の児童劇は巧みであつた。(後略)

図画会 綴方と深刻な連関をみせて発展していつたものに図画があつた。どんな子もある程度深め得ることは色彩感覚にも依らうが綴方よりも楽なものがある。然もその感覚に於て、びつたり文表現と合致するのも面白い。例へば小林映子の写生は、その綴方作品を色で表現したやうなものであり、笈川求女にも同

じことが言へた。これは毎週一回放課後希望者を募つて方々へ出かけた。

赤い鳥社訪問 これは二回しか出来なかつた。遠いので全部の子供を連れてゆく訳にもいかず希望者のみを募つたら二回目には二十五名程あつた。その大部分は自分の綴方が雑誌に掲載されて特に興味をよせてゐた子供達であつた。鈴木先生はこの日を一日千秋の思ひで待ち焦れてゐたものらしく、非常なお喜びで茶菓を用意して待兼て居られた。この日は丁度明治大正文藝展覧会に掲げた漱石氏の写真を夏自家から贈られた目であつたさうで、よいことがふたつ重なつたと仰せられ、その写真を高く掲げたお座敷で、文豪漱石の書画や原稿等を持出されしみるゝと解釈を試みられた。かうしたことが子供等の精神に及ぼした好影響は甚大なものがある。先生は幾度も学校への訪問を計画なされたが実現し得なかつた中に御逝去となつた。(綴方の書) 一〇九〜一一三ページ)

かなり多角的、意欲的な教室経営である。これらの一つ一つが、直接的・間接的に綴方指導と結びついているわけである。

四人一組のグループを、学級活動にも学習活動にもその核として積極的に活用し、できるだけ子供たちの自主性を尊重し、唱歌や図画や児童劇などの表現活動をたいせつにするという学級経営のあり方が、木村不二男の綴方指導を、全学級的な表現活動たらしめていたのである。

これらの中で、直接的に綴方指導とかかわりの深いものは、学級

新聞の発行、「赤い鳥」その他の綴方雑誌の回覧、綴方副読本の使用、図画会等であるが、とくに注目しておきたいのは、綴方の副読本として、主に、小砂丘忠義氏の「綴方読本」を使用していることである、鈴木三重吉の門弟をもって自ら認ずる木村不二男が、生活綴方に対してほとんど生理的な嫌悪感をさへ示した三重吉とちがって、小砂丘忠義を「隠れた偉大な綴方界の権威であり恩人であつた。」と述べ、綴方の向上のための「貢献者」と評価し、業なかばにして他界したことを深く惜しんでいる点である。ここには、作家もしくは審美家三重吉と、教育者木村不二男の根本的なちがいがみられるのである。

図画が綴方と深い連関があつたことを述懐しているのも興味あるところである、この項に名前の出てくる小林映子と笈川求女は、「赤い鳥」入選者を輩出した不二男学級の中でも傑出した存在であつた。この二名の子供をめぐる問題については、のちに節を改めて考察することとしたい。

四

以上は、主として木村不二男の教室経営における「形式面」であるが、それらの「形式」を貫く指導の理念はどうであつたか、また、そこから生まれる教室の状況・雰囲気はどのようなものであつたか。

○教室を如何に家庭的に整へようかとは私の最も關心したところである。教室は何時も青空の下のやうに……それは勿論不可能なことであるが。それをモットーとして経営にかかつた。(一)

教室気風」一〇六〜一〇七ページ)

○私は自分の全力をあげて何時も健康状態に整へて置くことに最も努力を致した。代表の健康児の心身が理想で、百パーセントの吸収力ある強靱な胃腸を目標にした。随つて綴方の営為も、これに基づいて為された。子供各自が家庭その他の環境から附けてきた畸形箇所を矯正も、新しい營養素の吸収も、子供各自の自然的な同化作用も、この空気の中に晒して後に正常なものとなさせる。(同上、一〇八ページ)

○各自の自然的な同化作用……これこそ、教師の力を凌駕して素晴らしい効果をもつものであるとは私の極力主張するところである。遂にはそれこそ、どの子も、いい子になるのである。それがまた学校全体へ伝播され、家庭へも香を運んでゆくことは何とも楽しいものではないか。(同上、一〇八ページ)

○この快い教室気風を忘れ兼ねるものと見えて、転校していつた子供達は何時までそれ／＼の遠くから近況を問ふたり知らしたりする。かうした通信が何時も教室の掲示板の下に二三枚は貼られてゐた。また新入生がきても持上りの伝統的な気風に子供ながらの素早い感架を見せて二日もすると肩の凝りを去り、遂には最初からこの学校に学んできたもの、やうな気持ちになる。だから教師の方でも特に新といふ意識を働かす必要もなく、何時も同じ調子で学習を続けていけた。蒲田では四年の最初から持上つた六十名の男女児は、卒業間際には三分の一以上も入れ換つたが、私の子供に接する気持は首尾一貫してゐた。(同上、一〇八〜一〇九ページ)

- ①「綴方の書」では、「もうせんゐる家」。不二男教室入選第一作。
- ②この号、小林映子はこの作品の前に、尋四豊田正子の「うさぎ」がある。豊田正子としてもこれが初入選である。豊田正子の作品は、不二男教室の子供たちの作品とはば並行して「赤い鳥」に登場するわけである。
- ③「綴方の書」では「お見舞」。
- ④笈川求女は男児である。三重吉は初出の際、わざわざ挿入したわけである。
- ⑤五月にはすでに五年生になっているのであるが、木村不二男からあらかじめ受けとっていた作品を逐次掲載していくために、学年は尋四となっている。昭和九年四月以降も尋五となっているのも同じような事情によるものと思われる。
- ⑥「綴方の書」では「尋三」となっているが、これは木村不二男の校正ミスであらう。
- ⑦「綴方の書」では「お嫁さん」。付録の佳作集に収めている。
- ⑧「綴方の書」では「栄ちやん」。
- ⑨「綴方の書」では「尋五」。これは三重吉の思いがいか校正ミスであらう。
- ⑩「綴方の書」では「動物園」。

持上り学級三か年の指導のうち、最後の一年間（六年生。昭和九年四月～昭和十年三月）は、上級学校準備のために、さすがの不二男教室も綴方に徹することができず、「赤い鳥」入選作は尋四・尋五の二か年間の指導のものに限られている。しかし、それにしても、

これは壯観である。木下紀美子氏の調査によれば、第二期「赤い鳥」入選綴方のうち、東京の作品数は、昭和六年五編、昭和七年六編、昭和八年十二編、昭和九年十八編、であるから、昭和八年・九年の二年間は、不二男教室の作品でその半ばを占めていたことになる。三重吉が、「赤い鳥」綴方二十年間の集大成として誇りをもって刊行した「綴方読本」（昭10・12・3、中央公論社）全五十六編のうち、同一教室から七編選ばれていることもりっぱといつてよい。

（注5）野地潤家編「作文・綴方教育史資料上」（昭46・5・5 桜楓社）所収、雑誌「赤い鳥」に掲載された入選作品——地域別調査——、同書二二八ページ。

五

ところで、このような教室経営の中で、木村不二男が抱いていた綴方観はどのようなものであったのであろう。彼の綴方観の一端はすでに「自序」の中にも見てきたが、ここでは視点を少しかえてその綴方観をさぐることにしよう。

「都市の綴方」の章に、「5「作文一課目」提唱」という一節がある。これは、中等学校の入試課目として「作文一課目」がとりあげられるかみえて立ち消えになったことに関連して述べた、熱のこもった文章である。木村不二男は、現今の熾烈な中等学校入試の受験地獄を緩和するためには、作文を入試課目として課することが絶対に必要であるという。

○「尋常六年の読方算術」の他に他の一課目として断然、作文を

課すべきである。更に「算術・作文」とすべきである。模様に依つてはこれを暫く継続して、作文の足跡をみつちり研究すべきである。然る後、始めて「作文一課目」時代が来、即ち受験地獄は昔話となるであらう。(「綴方の書」二六七ページ)

ここにみられるように、「作文二課目」とは、作文を他の課目に加えて課するというのではなく、ただ「作文一課目」のみを受験課目とする、という意味である。まず、現状の「読方・算術」に作文を加えるところから出発し、やがて「算術・作文」とし、しばらく研究期間をおいた上で、最後には「作文一課目」にしぼるべきだといふのである。

木村不二男がここまで強く「作文一課目」を提唱する根拠は、彼が、作文(綴方)を「全子供の総和」であるとみるところにある。

○小学校に於ける綴方には、全教科、子供の全生活が網羅されて、側面にうかがはれる。手つ取り早く言ふならば、全子供の総和である。読方教育がよく行はれてゐるか、否かもこれに明瞭に證明される。嘘字当字、語句の言ひまはし、熟語の使用、語意を誤られて使用された語句、新出文字のマスター程度、六年位になつて三年程度の漢字しか使用出来ぬ子もある。読文による内容把握深度も、綴方に逆に表はれる。書方教育が如実に綴方に書かれる文字に依つて表はされることは言ふ迄もない。それに依る精神生活程度も、個性も、書かれた文字に依り、書き様に依り、書き癖により、且文自体により一見される。修身教育

は言ふ迄もなく文を一貫する人間道徳線に依つて察せられ、国史も地理も、理科もその見解が広い程に表れた文の豊饒味、或ひは表れたことに依つて更に表れぬ方面まで暗示させる。情操の貧富、健康の程度も直覺させる。(中略)

文を一読して最後に残るものは何か、全子供の評価である。この評価こそ文を統一し、全子供の価値を結晶させたものである。(同上、二六九ページ)

「全教科」といつつ、この中に「算術」についての言及がないところが木村氏らしいといえようか。木村不二男は、さらに熱っぽくことばをつづける。

○都市に於ける生産と消費の経済的根底の深い認識、それは都市生活者にとつては有力な舵となるであらうが、人はパンのみに生きる者に非ず、これのみでは全人間生活に必要なものが多分に欠けてゐる。算術のみに依る考査等はこれに類する。在来用ひられたどの科目に依るもこれと大同小異。どうも、一本の腕、一本の脚、それ等と全人間を代表させて考査し、子供の一生の使命を棄り去つた感が深い。綴方は此等の欠点のすべてを補ひ、いま述べた最も生活的なものを目標に置く点から理想的なものと見られるのである。(同上書、二七〇ページ)

○在来の試験制度による試験勉強とは、中なる本陣を目標に置くことなく、罅や、石垣のみに当てられた砲弾であつた。人間を考へぬ、科目のための科目試験。それに伴ふ科目倒れの悲劇。

これ等はすべて、中等学校本位、人間の正しい成長を無視した、教育に逆行する姿勢の故による。(同上書、二七一ページ)

○中学校は小学校を土台に、小学校の良き延長となつてこそ自然であり、理想的なものであつて、教科本位の前に人間を見ることなく、これ／＼の知識をこれ以上持つてゐぬものは入場まかりならんと、徒らに試験問題を難解に構へて学校の箔をつけようとする輩のなかに行はれる教育こそ、生活上を阻害する唯一の代物であらう。(同上書、二七一～二七二ページ)

この強烈な糾弾・告発の姿勢は、彼自身の生々しい体験からきている。

昭和七年四月、北海道から東京へ出て来た木村不二男は、四年の男女組を受持ち、六年卒業までの三か年、持上りで指導した。みんない子で、教室経営もしあわせいっぱいの雰囲気を進めることができた。教室は小さな楽土であつた。「綴方の書」二〇六ページ、「都市の綴方」の章。前に引用した箇所参照)それが、最上級の六年生になると状況が一変するのである。

○其処には小さな楽土があつた。一軒の家であつた。誰か一人病気で欠席した者があると、その心配は全級に及んだ。一人の幸福は全員の幸福となつた。だが都市の学校の常は卒業学年に入ると勢、上級学校入試準備の問題が起る。かうした悩みが待伏せてゐることは承知の上ながら、これ程であるとは知らなかつたことである。随つて坦々と進んでいつた最初の教室経営のプ

ランも、せい／＼四、五年の二箇年で、最後の一年は尻切とんぼの形となつた。「都市の綴方」二〇六～二〇七ページ)

○その卒業の時に上演された「試験地獄」なる一作は彼等の体験を籠めて深刻なものがあつた。傍道に入るが、Hといふ子は府立第○高女の第一次試験に合格して、教師も親も本人ももう入つた気持でゐたのが、第二次に振落とされたのである。この悲報には真実、全級慟哭したものであつた。第一次に合格さしておいて、第二次には振落とすといふ風な甚大な悪影響を及ぼす制度は出来るならば避けられたいものである。その犠牲者である所のH自身の創作であつた。

試験てふ悪魔が丁度衛生の活動写真の肺結核菌のやうに諸所を横行する。深夜までの猛烈な勉強、親共の半狂乱の焦燥その他、あらゆる場面が展開される。悪魔は散乱した髪、鍵にまけた指を抜げて掴みかゝり、あらゆる子供を喰つてゆく。こんなものはやらすべきではない、これをみて、しまつた!こんなものが出て来て……と思つたが後の祭であつた。「教室経営」2組織、「児童劇の会」の項。前の引用の際、(中略)とした部分。一一一～一一二ページ)。

「悪魔は散乱した髪、鍵にまけた指を抜けて掴みかゝり、あらゆる子供を喰つてゆく。」——「試験地獄」の犠牲者である子供自身の創作劇であるだけに、木村不二男が受けた印象は強烈だつた。「私の教育生活の前半は村落で後半は都市に於てゝある。だが特に悩んだのは後者のそれである。」「都市の綴方」二〇二ページ)というと

きの、「悩み」の最たるものは、この「試験地獄」の問題であつたのである。

この、教師の「悩み」、そして子供たちの「悩み」を、理想的な形で解決する方法は、入試における「作文（綴方）一課目」の採用しかないというのが木村不二男の主張である。

○綴方一課目のために、小学校に於けるあらゆる教科目は、在来
の入学試験によつて歪曲され勝の姿勢をその本来の健康状態に
復帰させ、将来の生活に血となり肉となる着実自然な消化作用
を営むことが出来る。

綴方一課目となつたとて、競争はどうしても避け得られない
と言ふ人もあらう。然し、それは既に、在来の血を絞りを、肉を
削る、無意義有害な試験競争ではない。勉強は綴方そのものに
向けられるよりも、それが良き土壌たるべきあらゆる教科目、
あらゆる生活の良き準備にこそ注がねばならぬ。然もかゝる
勉強はとりも直さず遠く人間の本陣を目標にし、よき社会生活
の予想をこそ伴ふ。それは当然、人間のよき日常生活につなが
る所のものである。如何なる人間もせねばならぬ向上競争でこ
そあれ、断じて試験地獄ではないのだ。（都市の綴方」二七二
ページ）

○以上はほんの仮初の一投石にすぎぬかも知れぬが、熟考するに、
在来の試験地獄を退散させ、教育をその本位に復帰させ、子供
の正しい成長を期するにはどうもこれ以外の方法は目下無ささ
うに思はれるのである。（都市の綴方」二七二ページ）

以上が、木村不二男の「作文一課目」提唱」の要点である。
試験地獄の不毛を嘆き、その非人間性を告発する声は、今日にも
そのまま通用するものといえようが、しかし、これほどの深い信頼
を綴方に寄せ、これほどの情熱をもって「作文一課目」を提唱する
人は、今日見あたらない。木村不二男の教室から「赤い鳥」入選者
が輩出した所以である。

六

「綴方の書」には、小林映子と笈川求女の作品がそれぞれ四編ず
つ収められている。

もうせんゐた家	尋四	小林映子
お寺まゐり	〃	小林映子
奥多摩	〃	小林映子
富岡	尋五	小林映子
お母さんの帰られた日	尋四	笈川求女
お見舞	〃	笈川求女
弟	〃	笈川求女
鋸山	尋五	笈川求女

先にも見たように、小林映子は四作品全部が、また、笈川求女は
「お見舞」と「鋸山」とが「赤い鳥」入選作である。（このうち、
「奥多摩」「富岡」「お見舞」の三編は特選）

小林映子と笈川求女は、ともに、木村不二男の教室を代表するす
ぐれた書き手であったが、中^(注)でも、小林映子は、その表現の密度の
高さからいって、単に不二男教室といわず、「赤い鳥」綴方二十年

間の作品の中でも第一級の綴方といつてよいであろう。

(注6) 木村不二男は、「都市の綴方」の章を小林映子の四編のみよつて、また、冒頭の「ある少年記」の章を、笈川求女の四編のみよつて構成している。木村不二男は、綴方に才能ある子供を特別扱いにして個別指導するようなことは厳に戒めていたようであるが、それでもやはり、この二名の子供のできればは別格であつた。

このうち、「もうせんゐる家」は、北海道から東京へ出てきたばかりの不二男にとつて、極めて意義ぶかい作品であつた。

○次の文(北岡注、「もうせんゐる家」をさす)は四年一学期終頃に出てきたものであるが、私にとつては記念すべき第一作品である。「赤い鳥」にもこの組からこれが初めて載つた。「都市の綴方」二〇三ページ)

陰に陽に、父文助の感化を受けつづけ、自らも北海道時代かなりの実績を積んで、下地が十分にできあがりつゝあつた不二男が、東京という新天地を得て、都市の教師たることに徹する決意をしてから、「もうせんゐる家」の「赤い鳥」入選をきっかけにして、一挙にその綴方魂を噴出させた観がある。その噴出も、子供たちが「試験地獄」に血眼にならざるを得なくなるまでのわずか二年間(昭和七年四月から、昭和九年三月まで)に限られてしまったのは惜しまれることだが、ともかく、その噴出のきっかけを作つたのは小林映子であり、「奥多摩」「富岡」などによつて、「赤い鳥」綴方の頂点

を極めたのもまた、小林映子であつた。

しばらくすると、お父さんは「お湯に入つて来よう」と言つて浴衣を着て出ていつた。廊下を曲つて風呂場に来た。きれいな白レンガの風呂場であつた。私は洋服をぬいで湯の中に入つた。私は少しあまつたれるやうに「ね、お父さん明日はあそびたいわ」と言ふと、お父さんは「それじゃ明日潮干狩でもしよう」と言つた。風呂から上つて外を見ると、もう、まっ暗であつた。

先に出てゐたお父さんは、黄色いやうな青白いやうな電燈の下で、首をかしげながら字引をひいて、本を読んでいらつしやつた。私は廊下の前にある手すりにつかまつて海をながめた。暗い室と暗い海、波が来るのか、海面がとき／＼きら／＼と光る。上を見ると小さな三日月のお月さんだ。ざぶんざぶんといふ音が、なぎさへ来るとさあツと言ふ音にかはる。とても寒い音である。お父さんが「映子、もう勉強がすんだのか?」と言つたので、ひろい部屋のみで又宿題をひつぱり出した。何だかあんまり気がす／＼まなかつた。ごう／＼海が鳴る音のまん中でしてゐると、とき／＼気が遠くなるやうだつた。

これは、「富岡」の一節である。よくもわるくも、文芸主義綴方といわれた「赤い鳥」綴方の典型がここにはみられる。三重吉の評語も、「うまいものです」「すばらしい感覚です」「実感がにじみ出てゐます」「貴い傑作です」というように最大級の賛辞に満ちてゐる。たしかに、散文詩といつてもいいほどの詩情がここには読み

とれるのであるが、木村不二男のこの作品を見る目は「贅辭」とはほど遠いものである。

木村不二男は、「お父さんが「映子、もう勉強がすんだのか?」と言つたので」以下を引用し、「ごう／＼海が鳴る音のまん中でしてゐると時々気が遠くなるやうだった。」にはわざわざ傍点を付したあとで、次のように言う。

○この一節幻想風な詩情に騙されてはならない。これは外から感ぜられる詩感で、子供自身にとつては詩どころではないのだ。

この状況こそ、都市と自然との争闘である。すなはち、大人に表れた都市と、子供に表れた自然とが対抗してゐる格構である。(中略)

都市性は此処まで来ても子供の自然性を奪取して自分に同化させることを忘れない。都市の学校の五年六年とは一般に上級学校の入学試験準備の為に血眼にならねばならぬ時である……とされてゐる。作者の立場は丁度この時に当面してゐる。(中略)この間には親に対する気兼ねやら、つゝまじき怨み、ほつとしたさ、等が混入してゐて、誇張して想像を加へるとうんざりした、呪はしい眼つきが見えてくる。(「都市の綴方」二五三〜二五四ページ)

「富岡」のような作品に、「都市と自然との争闘」を見、海鳴りをききながら宿題をしている作者の目を「呪はしい眼つき」とまで言うのは、やや神経質に過ぎるようにも思えるが、不二男としては、それほどまでに都市のいわゆる「生活競争」をきびしく受けとめて

いたということであろう。不二男のいう「都市性」の一面である。木村不二男は、この一節のみでなく、「富岡」の作品全体を流れる調子についても「都市性」の不安定さを指摘している。

○まづ全体の調子として、この一文の中には、何かしら読者の眼をちら／＼かすつていつても、心底にしつくり響いてこないものがあるに相違ない。(それはこの前の例文に於て殊に甚だしかった。それは溪谷を流れる水の如く、落着かないし、且つ忙しとも忙しい。作者の性格とも見られ、私から言はずれば都市性が、敏感正直な子供を透写して、綴方に現れたものである。都市の呼吸の音なのだ。それが都市ならぬ違つた場所へきていと明白になつたものである。)(同上、二五二〜二五三ページ)

「この前の例文に於て」というのは、「奥多摩」をさしているのだから、不二男氏は、小林映子の、この二つの特選作に対して単に秀作と呼んで喜ぶような心境にはなかつたわけである。第二作の「お寺まゐり」も、第一作の「もうせんゐた家」との比較で、

○前者(北岡注、「もうせんゐた家」はその詩的な純感とたゞ／＼しさの故に読者の愛好を呼ぶ作品であつたが、これ(北岡注、「お寺まゐり」は反対に、行きとゞまきすぎ「チャッカリ」を見せ、喋舌も加つて、むしろ愛好とは遠い作品であらう。同上、二三二ページ)

という評価を受けているのである。この不二男の評語の中に、不二男の、都市の綴方に対する本音が端的に表れている。都市の子供たちによる都市性に根ざす綴方、すなわち、都市の綴方、の樹立を

真剣に志向しつつも、自らの「愛好」の心情は、必ずしも十全にそれと共に鳴しえないでいる不二男の、ナマの声がここには聞けるのである。

(注7) 都市児童を支配してゐるところの絶対のものを知り、それに基づいて生活指導法を案出し、斯くも難物視される都市の綴方をも地つきに樹立せしめ得るのではないかと思ひ立つた。私の綴方生活といはず全都市生活はこの眼によつて一貫されてきたのである。(傍点は原文のまま。「都市の綴方」二〇四ページ)

七

小林映子の作品にはもう一つしっくりしないものを感じていた不二男であつたが、いま一人の「赤い鳥」特選児童、笈川求女にはほぼ全面的な共感を以てあつた。

笈川求女は、悪童の評判の高い子供であつたが、不二男は、その乱暴な外貌の底にこの子の「純」なるものを見届けていた。笈川求女の「お見舞」についての解説の文の中で、不二男は次のように述べる。

○彼は自分の正当と思はぬことには決して頭を屈しない。だが彼のした行為等を静かに分析し批判してみせるとそれが悪いと解つた場合にはばろく泣きだす。泣いてその子に謝罪にゆく。

その外貌を飾る乱暴、猪突、皮肉、涙、ねばり、激憤、頗る變化に富む外形は、その何れにもこの文(北岡注「お見舞」)に見られるやうな純粹の分子が明瞭な頭のひまひまに働いてゐるか

の親があつた。(「今の子供」の章、「綴方の書」二七ページ) ○悪童とこの文とは一致しない。読者は私のすつばぬき等を信じないかも知らぬ程にこの文は純情なものがある。実はこれがこの少年の奥底なのであつた。子供の觀察を此処まで届けねば本当の生活指導は生まれぬのでは無からうか。(同上、二八ページ)

笈川求女を受持つた四年の新学期のはじめに、三年の時の教師から、「笈川ですか……あれはね、何と言ひますか、乱暴といふんでせうね、訳が解らんですよ」というふうで紹介された、その笈川求女の奥底を、綴方指導を通して確かに見ぬきえた不二男の、自信に満ちたことばである。ここで、「本当の生活指導は」と述べていることに注目したい。

五年生になつてからの作品「鋸山」に対しても、不二男の目はあたたかい。「鋸山」は、夏休みのある日(八月六日)、家族全員で房州の鋸山に登つたときの様子を書いた綴方である。

山はそこいらから急になつて、石段を上つては休み、石段を上つては休むやうになつてゐる。両方の山は丁度屏風を立てたやうでしげりにしげつた青葉の中から蟬が嵐のやうに鳴き立てゝゐる。かなり登つてから、休んで向かうを見ると、海ががらす板のやうにすべ／＼して見える。正男は、と思つて見たら、いつのまにかお父さんにおんぶしてもらつてゐた。お父さんもふうふう汗をかいてゐる。麓の方へ目をやるとお母さん達が小さく、腰をまげて

砂でもかむやうにやつとやつと登つてくる。僕は大きな声で、「お母さん、大丈夫？」とさげぶとこつくりしてゐるのがかすかに見えた。そのひまに僕たちを追ひ越して二人の若い男の人が何か話しながら、元氣よくぐんぐん登つていつた。(中略)

「やあ、これはいゝ景色だなあ」と言つて、お父さんはセメントの腰掛に腰をおろした。僕も英二も並んで腰かけた。丁度飛行機から見たらこんな景色であらうか。空も海もひとつになつてしまつて、空のなかに白帆がうごいてゐるやうだ。人の家は手のひらにのせられるほど小さい。山の木々からは蟬がしぼりだすやうに響いて、さつきは暑苦しかったが、いまは下に聞くせいか、とても涼しい気持である。お父さんは「せつかくこゝまできて、お母さんにこの景色を見せてやりたい」と言つて下へかけをりた。

しばらくしてから、お母さんたちがそろ／＼上つてきた。僕は「お母さん、もうじきだよ、じきだよ」と、どなつてはげましてやつた。頂上に登りつくとお母さんは良い景色も見ないで、へた／＼と腰掛にへたばつてしまつた。「いゝ景色でせう？」と聞いても、黙つてふう／＼してゐるので、「お母さん、なんともないの？」と聞くと、「あゝ大丈夫だよ。そろ／＼上つてきたから」と言つて、やつとはれ／＼した顔になつたのでうれしかつた。みんなでおむすびをとともうまく食べた。食べ終つて後をふりかへつて見ると、そこにあつた立札に、

「名も高き鋸山に来て見れば安房と上総をひきわけにけり」と書いてあつた。

鋸山—三百三十一M

約三六〇〇字ほどの「鋸山」の、最後の部分である。木村不二男は、この作品についても、克明に解説をおこない、自分の所見を述べている。

○子供によつてはひたすら我が足跡のみを追ひ、その記述に余念のない程他は一切お構ひなし、たとひ他を文中にとり入れても木石の感あるものが尠くない。この子の場合はその反対である。自分を深める程他人の気持が有機的なつながりをもつて全貌の網を拡げてゆく。やはり「純」をつきつめる程に鏡が澄んできてみんな正体をさらけてくるのではなからうか。(ある少年記)の章、「綴方の書」四九〜五〇ページ)

○この作は、何か作者の前途を暗示して私には快いものを感じさせる。作者が生活道に於て着々眼が開けてき、難険をよじ上ることに依つて人生の試練と清浄化が交互し、純粹な頂上にたどりつくことに依つて、我の中なる吾をキャツチした姿。結尾の歌がまた達観の境地を語つてゐる。實際この文を地で行けば理想的であらうが、それは遙かの彼方であらう。彼はいま中学三年生である。(同上、五〇ページ)

同じく「赤い鳥」綴方の秀作でありながら、「奥多摩」や「富岡」の洗練された作品の中に都市の子供の落ち着かなさや「呪はれた眼」を見、「お見舞」や「鋸山」の中に「悪童」の純情と前途の明るさを予見するところに、綴方教師木村不二男の面目があるように思われる。

一見粗暴だが、正義感が強く、行動力があり、頭もよく、母思い

で、根は純情な笈川求女少年は、不二男にとって、村野賢哉少年(「当番」で「赤い鳥」佳作入選。)とともに、頼むに足りる人物であった。笈川求女よさを十全に把握し、また伸長させることができた木村不二男の、綴方教師としての充実感が、「彼はいま中学三年生である。」のこぼの中にこめられている。

木村不二男によれば、笈川求女の綴方は、これ以上進みえないまでに内部的絶対の純粹境をかち得た「赤い鳥」綴方が今後進むべき方向を示す指標ともみなすべきものであった。

○人間を内省的につきつめて純粹をかち得た「赤い鳥」綴方は今後はその発展の矛先を外都へ向けて赤い鳥の世界ならぬ一般社会へ臨むべきである。(中略)笈川求女的なものゝ一般的達成にまで——これこそ三重吉先生一代の念願であつたにも拘らず、これに着手されかけて御他界されたことは痛惜耐へ難きものがある。

不肖等に託された任務も此処に在る。(「鈴木三重吉氏研究」、三五七ページ)

「笈川求女的なものゝ一般的達成にまで」が三重吉の念願であつたし、今はそれが「赤い鳥」綴方教師たちに課せられた任務であるというのである。

木村不二男は、右のこぼをもつて「鈴木三重吉氏研究」の章を閉じている。笈川求女を中心に叙述した「ある少年記」の章にはじまった「綴方の書」の本文も、これをもつて完結しているのである。

木村不二男の教室からは、小林映子や笈川求女のようなすぐれた書き手が育つていったが、不二男には、才能に恵まれた綴方優等生だけを特別視する姿勢は全くなかった。彼は第一の章である「ある少年記」を次のように書きおこしている。

○回顧すれば、私の十年余りの教育生活に、指導に當つた子供の数は直接受持でなかつた者をも含めて八百人は超えようか。

先づその中で、特に代表的な進展を示した子供(北岡注、笈川求女)を取り上げて綴方に於ける縦の成長方面から述べた方がよいと思ふ。

断つておきたいことは、これは特に個別指導をしたその記録ではないといふことである。人に依つては綴方に才ある子を見出すと、他の者の指導を怠つてもその一人に教師の情熱を傾注する向きもある。それは既に厳正な教育道を踏み外した者であることは言ふ迄もない。あるべき教師の態度とは太陽の如く公平でなければならぬ。ある一人が公平に撒かれた太陽の光にその素質を適應させてぐんぐん伸長し、その伸長が全級を刺戟して他をも動かすことは宜しい。然し、光がある一方にのみ偏して他に及ばぬことはいけない。

また教育全般を特に綴方の方面からのみ取上げた書に就いては、その著者が他の一切を放棄してもたゞそれ綴方にのみ終始して行くかにもとられるものである。

綴方とは全身に於けるひとつの眼で、何処までも教育全般の一部分である。

着実な人間教育こそよい綴方の母胎であることは、健全な観

の子が健全であると同様である。「綴方の書」二〜三ページ

ここには、著者の、綴方指導についての基本的な考え方が明確に語られている。小林映子や笈川求女のほかに、数多くの「赤い鳥」入選児童が育っていったのも故なきことではないのである。この小論を閉じるにあたって、一言、このことを指摘しておきたいと思う。

九

「綴方の書」は、形式的に見れば、決して十全な実践記録とはいえない。内容の上からいっても、叙述の上からいっても、かなり奔放な調子がみられる書きぶりである。緊密な文章とやや散漫な文章が混在している。しかし、二年の間に、合計十名の、べ十六編の「赤い鳥」入選作を出し、小林映子や笈川求女のような、「赤い鳥」綴方の頂点をきわめ、または、「赤い鳥」綴方の今後の指標ともなるべき書き手を育てた木村不二男の、子供を語り、教室を語り、綴方観を語り、試験地獄を語る筆の中から、彼の「綴方教室」が彷彿としてくるという点で、これはやはり、「赤い鳥」綴方教師による貴重な実践の記録といつてよいであろう。父文助の「村の綴方」（昭和四年、厚生閣）、大木頭一郎・清水幸治共著の「綴方教室」（昭和十二年、中央公論社）などとともに、「赤い鳥」綴方実践記録の一つとして、歴史的・教育的意義を主張しうる一書といえるのである。

（群馬大学教育学部教授）